ICME-8 についての所感

八杉満利子
京都産業大学
e-mail: yasugi@cc.kyoto-su.ac.jp

以下は、一個人としての参加者の一般的な感想です。

- いろいろな組織の集合体という感じで、一個人としての参加者が参加できるものが少なかった。Project Report なども、初めて聞いたのでは、あまり意味がわからない。慣れない物にとって、会議全体の構成が理解しがたかった。午後５時からは継続的なサブ組織の会合らしく、時間があまった。Project Report をひとつ聞いたが、それまでの経緯を知らないとあまり意味がなかった。一般の参加者が集中して出席できるような企画がほしい。こういうサブ組織の会合の裏番組として、ポスターセッションとは別に、contributed paper の発表と自由討論の場があったら、有効であろう。ほかの会議でも、contributed paper に面白いものがあることが多い。

- ポスターセッションは、力作が多かったと思う。しかし他人の関心を得るのが難しかったようだ。分類がされていないので、漠然と見て歩くことになって、ゆっくり議論できなかった。惜しい。場所も悪い。外の壁はわびしいし、中の廊下は蒸し風呂のようだった。また、ポスターを scotch tape で貼っていたら、粘着すると、怒られた。あらかじめ指示をすべきである。

- パプアニューギニアで数学教育を教えている女性から、下記のメッセージを、ICME-9 の組織委員にぜひ伝えるように、といわれた。

  「Developing countries からの出席者が、自由に議論し、数学教育の問題点を探り、協力しあうための集会を用意して欲しい」

- 食事時に他のテーブルから、「commercial と academic を混同している」という趣旨の Casio への批判が聞こえた。

- TG3 （University Mathematics）一日目 （algebra の部）に出席。授業方法の工夫が主題だった。１年次の最初はレベルの個人差があるので、学生に主体性をもたせたレポートを書かせ、その評価をする、などの報

告がされた。問題点はどこでも同じであることがわかったが、講演は、ちょっとした工夫、という程度のものであった。また、代数、あるいは数学固有の工夫、というものではなくて、一般的な教育法のテーマであった。内容的な工夫を知りたかった。また、時間が少なく、表面的な議論に終わった。こういうことにもっと時間をとって欲しい。

私は大学での基礎科目の教育において、教えるアイテムと学生の理解との関係についてのデータを集めている。しかし、それらを分析する方法論を知らないので、そういうことを学びたくてこのグループに出席した。その目的は達成されなかった。

この関連で、ワークショップが開かれた。個人的に話しをする良い機会であったが、実際の作業はあまり行われなかった。こういう企画をもっと工夫すると良い。

- TG4(Distant Learning) の二日目に出席。面白かった。村上先生が大活躍されていた。Mathematica による問題解決の実験において、地域色があったか、学年差があったか、など、詳細を知りたい。

  討論も真剣に行われた。教育方法の工夫に重点がおかれ過ぎて、内容の進歩が遅れるのではないか、英語の独裁になるのではないか、計算機など教育機器の発達で、地域差が大きくなるのではないか、などの問題点が指摘された。私は、これらは教育全体で今後深刻な問題になると考える。古典的な方法ならば、いつかは発展途上国も追いつくだろうが、便利さがすすみすぎると、格差は大きくなる。このような問題点を認識したことは、収穫であった。

- Regular Lecture を聞くために座っていたが、予定より１５分すぎてから、主催者がとんできて、講師がこの会議にきていない、と伝えた。日本でこういうことは起こらないと思うが、単純にみっともない。

- 数学に限らないことではあるが、教育の問題は、検討すべき面が多く、社会環境なども無視できず、データの分析や、将来へ向けての提言などは非常に難しい、と実感した。研究も実践もまだスタート地点だと思う。